充実した Stanford な 1 週間

鳥取大学医学部附属病院　福井亮平

今回，私は平成 25 年 7 月 21～28 日に米国スタンフォード大学で開催された平成 25 年度海外研修派遣に参加する機会を得た．研修において様々な知見・経験を得たので報告する．

1. 研修から得たこと

私が今回の研修に参加した目的は，研究に対する自身のモチベーションアップと，海外の研究施設を見学したいと考えたからである．本研修の内容は正に私の目的を満足させる内容であった．

Lucas Center で行われた講義は，Mike Moseley 先生を筆頭とする素晴らしい講師陣により非常に充実したものとなった．内容としては，Cardiac imaging，PET/CT・MRI，そして先駆的な Molecular imaging の講義であった．PET/MRI の講義は，その技術的な問題点から解決法，そして臨床的な有意性までを詳しく拝聴できた．Molecular imaging に関する内容は実験室レベルのものまで含まれていたが，いつか臨床へ結実するであろうことは先生方のダイナミックな講義から明らかであった．独自の技術で起業されている講師の講演もあった．特に，単色 X 線を利用し軟部のコントラストを強調する単純 X 線画像(DEI)技術には研修生皆が驚いた．高出力の X 線管が必要であり，臨床応用は未定であったが，CT にも応用可能で，将来整形領域の MRI の脅威となる可能性を秘めていた．私は業務で MRI を担当した経験が無いため，他の研修生に比べ講義内容の理解度が低いことは否めなかった．今回の研修で唯一の残念な部分であった．しかし，それを引いても余りある講師陣のプレゼン能力には非常に感銘を受け，自身の能力の低さを否応なく感じた．研究内容に自信を持って発表することは，言語が違えど聴衆にしっかりと伝わるということを再認識できた．また，施設見学では多くの研究の場を垣間見ることができた．研究室の隣に MRI や血管撮影装置が設置されているなど，研究環境の充実に驚かされた．見学中，ラボでブタの解剖を行っている現場に遭遇した．解剖を行っているのは医学部を志す高校生であった．大学に入学する前から専門の教育を施す米国教育の一端を感じることができた．

2. 診療放射線技師の国際的視野・米国の技師との違いについて

フリーディスカッションでは本邦の技師の国際的視野，および米国技師との違いについて，というテーマでディスカッションが持たれた．話題となった内容や私見を述べたい．「国際的視野」は 2 通りを考える必要があった．それは能動的か受動的かということである．能動的とは，自ら行動し海外へ研究内容などを発信することである．留学もこれに含まれる．受動的とは海外の最先端の技術を本邦に導入し，日本独自の環境でそれを昇華させていくことである．どちらも重要であるが，前者は特に向上心と学会のバックアップが必要となる．国際化を目指し学会も多くの手段を用意している．論文の英語化(RPT 誌)，発表スライドの英語推奨と，英語口述発表枠の設置などである．これらは着実に広がりを見せ，論文や発表が海外から寄せられることも稀ではなくなっている．こういった国際化の流れを感じることは，本邦の技師にとって良い刺激になっていると思う．しかし，性急な変化は多くには受け入れられない．英語への拒絶反応は，もはや日本の文化であり，これは一朝一夕には乗り越えられない壁である．例えば，JRC2013 では日本語・英語発表が 1 セッションに混ぜて展開された．これは聴講者には混乱を与えたかもしれないが，発表者にとって日本語の中で英語発表できるという環境は，非常に安心感のある場であったはずである．このような緩やかな英語化への変化は，長い時間を要するが，受け入れやすい環境を作るだろう．米国の技師制度を知ったことで，さらに国際的視野は必要だと感じた．米国の技師は，基本的に 1 モダリティで業務を行い，さらに Clinical の技師と Research の技師に分かれている．本邦の技師はマルチモダリティ，臨床と研究は並列して行うことがほとんどであるから，その差は圧倒的である．国内の国際化が進んだ学会で培われた経験を海外へ輸出できれば，Japanese Technologist が世界の脅威となれるかもしれない．グループディスカッションでは，大学における技師養成過程にも話が踏み込んだ．授業を英語化した大学は日本にも存在する．しかし，初めから英語で学ぶのではなく，日本語を土台に英語を積み上げていくために，例えばバイリンガルによる授業形態といったものが意見として出た．様々な意見が日々出る中，アメリカンビール片手に毎晩 AM2:00 まで話は盛り上がった．研修生のモチベーションの高さに驚かされた 1 週間であった．そして，私が研修に参加した目的は容易く達成された．

様々なPower !を与えてくださった
Mike Moseley先生(左)と筆者(右)

謝辞

1 週間を短く感じさせて頂いた第 8 期研修生の皆様，21 人目の 8 期生である北里大学佐藤英介先生，GEHC-J の皆様，そしてスタンフォード大学の先生方に厚く御礼申し上げます．そして，末筆になりましたが，本研修への参加を快く承諾して頂いた鳥取大学医学部附属病院の山根技師長，および放射線部技師諸兄らに深謝します．